

武蔵野日曜集会

神の仁慈

—— ロマ書第1章16節～2章16節 ——

1996年3月17日(武蔵野)

小池辰雄

頑固な民 神の人 あるがままの自分を投げ入れる 無即無限無量 神の根源語の音楽の世界
直観的な角度 天来の使命 霊なり生命なり キリストという福音体 平伏しの霊 無信の信
福音の世界を散歩する 即身即道 神の仁慈 魂に響くもの 烈々たる福音

【ロマ書1・16～2・16】

16 我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救を得さす神の力たればなり。17 神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し。……

1 然れば凡て人を審く者よ、なんじ言い遁るる術なし、他の人を審くは、正しく己を罪するなり。人をさばく汝もみずから同じ事を行えばなり。2 斯る事をおこなう者を罪する神の審判は真理に合えりと我らはしる。3 斯る事をおこなう者を審きて自己これを行う人よ、なんじ神の審判を遁れんと思ふか。4 神の仁慈なんじを悔改に導くを知らずして、その仁慈と忍耐と寛容との豊かなるを軽んずるか。5 なんじ頑固と悔改めぬ心により己のために神の怒を積み、その正しき審判の顕る怒の日に及ぶなり。6 神はおのの所作に随いて報い、7 耐え忍びて善をおこない光栄と尊貴と朽ちざる事を求むる者には永遠の生命をもて報い、8 徒党により真理に従わずして不義にしたがう者には怒と憤懣とをもて報い給わん。9 すべて悪をおこなう人には、ユダヤ人を始めギリシヤ人にも患難と苦難とあり、10 凡て善をおこなう人には、ユダヤ人を始めギリシヤ人にも光栄と尊貴と平安とあらん。11 そは神には偏り視給うこと無ければなり。12 凡そ律法なくして罪を犯したる者は律法なくして滅び、律法ありて罪を犯したる者は律法によりて審かるべし。13 律法を聞くもの神の前に義たるにあらず、律法をおこなう者のみ義とせらるべし。——14 律法を有たぬ異邦人、もし本性のまま律法に載せたる所をおこなう時は、律法を有たずとも自から己が律法たるなり。15 即ち律法の命ずる所のその心に録されたるを顕し、おのが良心もこれが証をなして、その



念^{おもひ}、たがいに或は訴え或は弁明す――¹⁶これわが福音に云える如く神のキリスト・イエスによりて人々の隠れたる事を審きたもう日に成るべし。

●頑固な民

パウロは当時の世界の最大の都市、ローマに行つて福音を伝えたいという念願をもっていた。パウロはキリストのいわゆる直弟子ではない。むしろ、キリストを信ずる者を迫害する勢いで、ダマスコの方に向かつて進んで行つた。もともと、ユダヤ教です。また彼はギリシヤの文化にも通じて、なかなか知的な男であつた。霊的な面と知的な面と両方を備えていた。ただ、キリストを受けとらない。

今でもユダヤ人はキリストをなかなか受けとらないようですね。「エホバ」の神さまは本当は「ヤーヴェー」というんですが、「我は在りて在るもの」という意味です。ユダヤ人というのはなかなか頑^{かたく}な民なんです。「頑固な民」という言葉も聖書の中にある。頑固なんだ。だから、イエス・キリストが現れても、新興宗教くらいに思つて受けとらないわけです。むしろ迫害をする。キリストはとうとうしまいにユダヤとローマの兵隊に捕まつて十字架に架けられて生命をおとした。

●神の人

ところが、キリストという方は普通の人間ではない。湖の上を物理法則を超えて渡つて来るようなことのできる方です。まあ大変な方です。また、どんな迫害に対しても、どんなに取り扱われても、何と言われようとも、そんなことを気にするような人ではない。キリストの相手にしているのは神さまだけ。まことに神の人なんです。

もともとイエスという方は生まれがそういう方なんです。マリヤと夫ヨセフとの間にキリストができたのではない。母マリヤが聖霊に感じて不思議な身ごもりをして、イエスは現れた方で、全く天的な霊的な源をもつ方なんです。全く例外者です。

「イエス」という名前は「神の救」という意味で、「イエホシュア」というヘブライ語です。「キリスト」というのは「油をそそがれた者」という意味です。「油」とは聖霊のこと。神の霊的な油を注がれた者、聖なる霊の方、まことに文字通り神の人です。

●あるがままの自分を投げ入れる

よく「信仰」といいますね、

「我々は信仰をもたなくてはいいかん」

と。私はいわゆる無教会で散々言われてきた。キリストを信じ仰いでいたつてだめなんです。私はそういう信仰は嫌いだ。キリストは神の人ですから、神と同質なんです。だから、キリストとの霊的な交わり、神交^{しんこう}です。キリストとの交わりです。平伏してキリストの中に



自分を投げ入れる。私の神交はそういうんです。信じ仰いでなんかいない。キリストの中にあるがままの私を投げ入れる。これは瞑想の世界で、祈りの世界で出来るんです。そうすると、キリストと一つになる。一如にされる。これはありがたい。こっちから信じ仰いでいたってしょうがない。交わりです。

「このどうにもならない者をあなたの中に投げ入れます」

と言つて、神なるキリストの中に自分を投げ入れる。それが救なんです。「救いたまえ」ではない。もう救はちゃんとそこに来ている。過去・現在・未来の小池というものはキリストの中で現に救われているんです。自分がどうだこうだではない。

「私は信仰なんかありません。私は何もありません、無者です」

と。無者も、禪宗のように自分で悟つて無になつたのではない。キリストから無を賜つた。我無き世界を、無私を、私の無い境地をキリストからいただいた。それが「罪の贖い」というんです。「罪」というのは「自我」です。自我が罪なんです。人間はみな自我意識をもっている。自分を何ものかと思つてゐる。そんなものは太陽の光の前に、霊的なキリストの光の前に何ものでもない。だから、

「私は信仰なんかありません。私はキリストに圧倒されて生きています。キリストの力に、恵みに圧倒されている。ぶつ倒されて生きている」

と言う。本当にそうですよ。そうすると、私はキリストの中にそのまま入れられてしまう。キリストと一如の世界です。これが私にとっては救なんです。「救いたまえ」ではない。

「もう救われております。ありがとうございます」

という、感謝だけ、讃美だけです。よく讃美歌で「くしたまえ」と未来的に言っているのがあるが、あんなのは私はまだるっこくしてしょうがない。

「ありがとうございます、感謝いたします」

という現在なんだ。神交の世界は本当の現実なんです。だから、楽でしようがなく、ありがたくてしょうがない。そういうしょうがない世界です。

説明なんかしている世界ではない。告白なんです。アウグスティヌスの『告白』という本がある。

「あなたの中に安らうまでは私たちは安きを得ません」

というのはアウグスティヌスの有名な言葉です。そういう簡単明瞭な世界です。あるがままの自分をキリストの中に、瞑想して祈つて、投げ入れてごらんさい。そうすると、グーッと力がくるから。

「主さま、ありがとうございます」

と言つて自分を投げ入れる。私は

「主さまー」

とお腹の中で叫ぶと同時にキリストの中に入つてしまう。もちろん平伏しの魂です。傲然



となんか入れません。傲然となんかやったら、サタンの中に入ってしまう。サタンは傲然たる自己主張のやつだから。

●無即無限無量

そういうのが私のたまわりたる無の世界です。無は即、無限無量なんです。無即無限無量を身をもって現した人はイエス・キリストなんです。キリストには父なる神の他は何もない。父が一切である。だから、彼はゼロなんだ。そうすると、

「自分は何も出来ない」

と仰ったそのキリストが

「我と父とは一つなり。だから私は何でも出来る」

という、全然反対のことが言える。それはありがたい境地です。イエス・キリストがそのことを身をもって証しなされた。

「自分は何も出来ない、何も言えない」

と、キリストは言っているんだ。ところが、神さまの力で神さまの言葉を楽に語っている。だから、キリストの言葉に圧倒される。それは神の言葉だから。そういうひとですよ、イエスという方は。「イエスというのは宗教的な偉いひとだ」なんて思ったつてだめです。キリストこそ本当の無者だ、そうしたら無限無量者だ。イエスはいかなる範疇はんちゆうにもはいらない。どんな哲学も、どんな文学もキリストを本当に現すことができない。キリストというのは大変なひとだ。ルターはちゃんと知っている。だから、ルターは

「聖書はかけらに過ぎない」

と言った。イエス・キリストというのは表現できるものではないということです。

●神の根源語の音楽の世界

我々は聖書の文字の奥の響き、を聞かなくてはだめです。音楽の世界だ。ギリシヤ語でもヘブライ語でもない。新約聖書はギリシヤ語、旧約聖書はヘブライ語で書いてあるけれども、その奥の神の根源語、というのは音楽みたいな世界です。ベートーヴェンでもバッハでも彼らの魂はそういうところから音楽しているのでしょうね。だから凄いんだ。ベートーヴェンは散歩しながら神の声を聞いた。森の囁きささや、水の流れの音、全部これは神の声ですよ。

だから、私はあなた方にお説教なんか絶対にしない。たまわりたる現実をただ告白しているだけです。皆さんもそういう現実で聞いていらっしやるから、「本当にそのとおりだ」ということですよ。語るも聞くも同じことです。

そういうのが本当の神交の世界です。お腹の底から「主さま！」と叫ぶと――なにも声を出すわけではない――もうそのまま直ぐキリストの中に入ってしまったって、力がくる、光がくる、生命がくる、愛がくる。概念で説明なんかできない。エックハルトが



「本当のことは言葉で表せるものではない」

と言った。エックハルトやフランチェスコの霊的な現実にはルターよりも凄い。

そういう神の根源語の音楽の世界です。最後は何語でもない。音楽です。とにかく、川の流れや風の音を聞いても、野に咲いている花を見ても、みんなこれは神の言ことばです。言ならざる言、姿の世界、音の世界です。

●直観的な角度

「キリストはこれこれのことをした方である」

と、分析して総合するような考え方はだめです、直観していかないと。日本人は直観的な角度の優れた民のはずなんでしょう、ヨーロッパのものを学んでから少しおかしくなりました。学ぶことは悪くはないけれども、いわゆるもつともらしいような話はだめだよな。

無、即、無限、無量、という。福音書を読みながらイエス・キリストという方に、その言葉、その行為に圧倒される。何といっても福音書は最高のところですよ。パウロは書翰でパウロ的な告白をしているだけの話です。旧約・新約聖書の全書の中で一番のところはどこかというと、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの四つの福音書が中心です。

「旧約聖書は我について証しするものなり」

とキリスト自身が言ってる。旧約はまだ預言の方だ。今もユダヤ人はキリスト道を受けとらないでゴタゴタやっている。頑なな民だから。

●天来の使命

リンカーン、グラッドストーン、ビスマルク、この三人が19世紀の大政治家です。みんな聖書を本当に読んだ人です。聖書が身についている人です。日本の政治家で、聖書が身についているような政治家がいるかね。どうも情けない。そういう霊的な根源がない。教育の世界でも、先生方がそういう世界を魂の中にもっているか。その点で精神的に日本は望みが薄い。「経済大国」なんて言ったってだめだ、精神大国にならなければ。

中国もあまり感心しないね、台湾とゴタゴタやっているけれども。本当の愛が、天来の愛がないからです。国際関係も本当は愛がなければだめなんです。勢力争いではない。「平和平和」というけれども、神さまとの関係、平安がなければ平和はこない。平安というのは縦の関係です。

とにかく、我々はキリストにぶつかって、このように改造されて新しい本当の世界に入りました。これは何もものも恐れなしに、あなた方の生活そのものがキリスト告白で進んでください。私は福音のための戦闘的な意志があるから、私は衰えない。霊的な力が上からくるから。今、92歳だけれども、年齢なんか問題でない。アブラハムは175歳まで生きた。モーセは120歳か。自分で年齢なんか数えたくないが、とにかく、神さまが「よし」と仰るまで地上でもつ



て活躍していきます。皆さんも、私よりも何十年か若いから、大いなるキリストにあつての望みを霊的な力で大いにやつてくださいよ。天に万軍あり。一人びとりは孤軍でいい。

「強者は独りあるとき最も強し」

という言葉が『ウィルヘルムテル』の中に出てくる。強い者は独りの時に一番強い。本当の勇者というのは独りなんです。それは天の万軍が背景にいる。上から力がくる。

私の生涯は兄貴の復讐戦だ。何ものかに対する復讐戦なんだ。福音的な戦いです。なぜ私は力がきているかというと、そういう天来の使命を私は感じているからです。あなた方も一人びとりみな天来の使命があります。ですから、キリストと一つになって大いにやってください。我々はみな使命的存在なんだ。何をやっていたって、本当の使命がある。男でも女でも。女の方は第二の国民を育てる大きな使命をもっている。

● 霊なり生命なり

なにしろ、福音書を読んでいると、もう光がきて生命が来てありがたくてしょうがない。あなた方、福音書をそういうように読んでいますか。意味ではない。意味の世界ではない。これは生命の世界です。

「我が言は霊なり生命なり」

とキリストは言つてらつしやるんだ。

「イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴^{かわ}かん。然れど我があたうる水を飲む者は、永遠^{とこしえ}に渴くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』」(ヨハネ4・13～14)

「イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食^{くら}わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠^{とこしえ}の生命をもつ、われ終りの日にこれを甦^{よみがえ}えらすべし。それわが肉は眞^{まこと}の食物、わが血は眞の飲物なり。わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。天より降^{くだ}りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、此のパンを食うものは永遠に活きん』」(ヨハネ6・53～58)

キリストは凄いことを言っている。もちろんこれは霊的な意味でキリストは言っておられる。だから、我々は死なない。「往生」という言葉がある。我々は往生する。次の世界に出かけて行って、新しい霊的な身体でもって生きつづける。聖書というものは熾^{さか}んなる、大変なものです。



●キリストという福音体

では、ローマ書1章に入ります。

16 我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救を得さする神の力たればなり。17 神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し。

この言葉は旧約の中にある言葉です。神の義はキリストという福音体において現れた。キリストは福音体なんです。具体的なキリスト自身が福音体なんです。神の国の現象体です。

「神の国は近づきたり」

というけれども、あの言葉はキリストは、

「私を見なさい。私は神の国なんだから」

というわけです。「神の国」というのは神さまの支配するところという意味です。神さまに完全に支配されている。それがイエス・キリストだから、正に福音体なんです。福音の音信です。

●平伏しの霊

「幸いなるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」

の「さいわい」というのは恵福、恵みの福さいわいということ。普通の幸せという意味ではない。

「心の貧しい」

というのは、

「霊の乏しい、霊が無だ」

ということです。霊が本当に貧しい人、ということは本当に平伏しの霊の人ということです。

「平伏しの霊の人は恵福なるかな。その人は神さまの支配下にある」

ということ。天国はキリストですから。キリストは天国体、福音体です。

「地獄・煉獄・天国」の詩『神曲』を書いたのはダンテですが、彼を煉獄から天国に導いてくれたのはベアトリーチェだ。女の人の方が先に天国へ行くらしいね。男は理屈っぽいからなかなかだめなんだ、女性のように直感的にいかないから。

ダンテの『神曲』は世界最高の詩です。イタリアはダンテの『神曲』があるが故に、その存在の意味ありというわけです。イギリスはシェークスピアか。フランスは『レ・ミゼラブル』のユゴーか。日本は何だ。日本にそれだけの作品があるかな。漱石さんでは押しがまだ弱い。深い宗教性が土台になればやはり最高のものは出てこない。宗教性がいかに大事かということはゲーテが言ってます。何といっても、キリスト道は世界宗教だものな。大変なものです。ゲーテの『ファウスト』は現世的な意味では素晴らしい本です。けれども、霊的な角度からはちよつと足りない。



● 無信の信

ローマ書2章に、

4 神の仁慈^{なさけ}なんじを悔改^{くいあらため}に導くを知らずして、その仁慈と忍耐と寛容との豊かなるを軽んずるか。5 なんじ頑固^{かたくな}と悔改めぬ心により己のために神の怒を積み、その正しき審判の顕る怒の日に及ぶなり。

恐ろしいことだね。

6 神はおのおの所作^{しわざ}に随^{したが}いて報い、7 耐え忍びて善をおこない光榮と尊貴^{とうとき}と朽ちざる事を求むる者には永遠の生命をもて報い、8 徒党により真理に従わずして不義にしたがう者には怒と憤恚^{いきどおり}とをもて報い給わん。

そのとおりだね。

9 すべて悪をおこなう人には、ユダヤ人を始めギリシヤ人にも患難^{なやみ}と苦難^{くるしみ}とあり、10 凡て善をおこなう人には、ユダヤ人を始めギリシヤ人にも光榮と尊貴と平安とあらん。11 そは神には偏り視給うこと無ければなり。12 凡そ律法なくして罪を犯したる者は律法なくして滅び、律法ありて罪を犯したる者は律法によりて審かるべし。

「律法」というのは旧約の律法のことです。

13 律法を聞くもの神の前に義たるにあらず、律法をおこなう者のみ義とせらるべし。——14 律法を有^もたぬ異邦人、もし本性^{うまれつき}のまま律法に載せたる所をおこなう時は、律法を有^もたずとも自^{おのず}から己が律法たるなり。

素晴らしい言葉だね。

15 即ち律法の命ずる所のその心に録^{しる}されたるを顕し、おのが良心もこれが証をなして、その念^{おもい}、たがいに或は訴え或は弁明す——16 これわが福音に云える如く神のキリスト・イエスによりて人々の隠れたる事を審きたもう日に成るべし。

なかなかいろいろな場合を考えて語っている。

「神には偏り視給うこと無ければなり」

とは全くそのとおりです。ユダヤ人だからどうだ、ギリシヤ人だからどうだ、そんなことは考えない。どこ人であろうと、問題は本当に——今の言葉でいうと——道德の世界を實踐しているかどうかということです。

「信仰によって義とされる」

という言葉がある。この言葉は非常に観念的になって、躓きになる。「信仰があればそれで義とされる」という。そうすると、「信仰、信仰」と言つて、「信仰によって義とされる」という言葉が命題みたいになつてしまう。信仰そのものがまたサムシング（何ものか）になつてしまったらだめなんだ。そういうサムシングになつている信仰がたくさんあるんだな。



「あなた、信仰がちゃんとしてますか。信仰が大事ですよ」
なんてね。そういうのには、

「何ありません。私は無です。キリストの恵みだけです。信仰なんかありません」
と言ってやれ。そういう無信の信は本当の信なんです。それが無限無量の世界です。

●福音の世界を散歩する

私は「復活」という言葉はあまり好きではない。復活という言葉は普通は「^ま復活た生きかえる」という意味だ。キリストは「生きかえる」ではない。霊的な新しい存在として顕れるんだ。皆さん、聞いていて楽しいですか。楽しくなかったらうそだよ。「先生の言うことはむずかしい」なんて、ひとつもむずかしくない。楽しいことを言っているんだ。これは福音だから。語るも聞くも同じこと。私はあなた方と福音の世界をこうやって散歩しているのは楽しい。散歩だと思っている。そういう気持ちで、このローマ書であろうと、福音書であろうと、読んでごらんさない。楽しくてしょうがないから。力がきてしょうがないから。聖書を読んでいる、力がこなかったら、本当は読んでないんですよ。意味の世界ではないんだ。生命の世界だから。

●即身即道

「我は道なり真理なり生命なり」

というキリストの言葉がある。即身即道なんだ。ヨハネ伝14章6節、

「6 イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。7 汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』。8 ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』。9 イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこない給うなり。11 わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。』(ヨハネ14・6～11)」

ヨハネ伝14章は素晴らしいところだ。聖書を読んでいて、楽しくならなかったらだめですよ。

「いや、これは楽しいな、力がきてしょうがないな」

と。そういう読み方をしてないかね。「これはどういう意味だ」なんて、意味ではない。響きの世界だから。

あの「知る」という言葉は「頭で知る」のではない。旧約聖書の預言書の中にも「知る(ヤーダツ



ハ)」という言葉が時々でてくる。これは「全存在で受けとる」ということです。創世記の
アダムとイブのところにも「知る」という言葉がある。あの「知る」というのは肉的な交
わりのことをいうのだけれども。これは霊的に全存在で受けとることを「知る」という。

●神の仁慈

ローマ書2章にもどります。

4 ^{なさせ}神の仁慈なんじを^{くいあらため}悔改に導くを知らずして、その仁慈と忍耐と寛容との豊
かなるを軽んずるか。

神さまがゆつくりと待つていらつしやる。そして、神さまの仁慈は、

「これは私は悪かった」

という悔改に、仁慈によって導くようなわけだった。それが分からないのか、というわけ
です。ところが、今のユダヤ人もこの神の仁慈をさっぱり受けとらない。今のユダヤには
どれだけキリスト教に改宗したのがあるのかね。ユダヤ人というのは頑ななんだ。

その頑ななのがひっくり返されて本当にキリストを受けとったのがパウロなんです。始
めはキリストを信ずる者を迫害していたのだから。パウロ(サウロ)はダマスコ途上で復活
のキリストに、霊的なキリストにひっくり返された。三日三晩、ものが見えず、食べ物が
食べられないという状態におかれて、アナニヤに按手されて、

「わが目より鱗の^{うろこ}ごときもの落ちたり」(使徒行伝9・18)

と、その時にパウロは回心した。アナニヤというのは選びの器だ。サウロを本当のパウロ
にしてやった。大きな間違いをしていたパウロは今度は、キリストを称える第一人者にな
った。エルサレムのいわゆる最初のお弟子さんたちよりも、キリストに会わなかったパウ
ロが本当にイエスを受けとる最大の弟子になってしまった。鮮やかな変化ですね。

我々も、人の過去をみて、どうのこうのと言うことはひとつもない。その人の未来をみて、
「あの人は今に凄いことになるぞ」

と、未来を希望をもつて見て交わっていく。

「でも、過去にこんな事をしたではないか」

なんて言うのはサタンの気持ちです。人の悪を思うのはサタンなんです。善を期待してい
るのが天使の心だ。それが福音の本当のありがたさです。

●魂に響くもの

だから、聖書を読んでいて楽しくてしょうがない。力が来てしょうがない。ありがたく
てしょうがない。そういう読み方になったら本ものです。いわゆる意味なんかどうだって
いい。読んでいるうちに聖句の中で、パーツと自分の魂に響くものがある。それでいい。
それが本当に読んでいることになる。



ブレイクの詩にこういう素晴らしい言葉がある。

To see a World in a grain of sand,

And a Heaven in a wild flower,

Hold Infinity in the palm of your hand,

And Eternity in an hour.

一粒の砂の中に 宇宙を観る

一茎の野草に 大空を観る

君の手の掌に 無限をつかみ

一刻の中に 永遠を持つ

いい言葉だね。これが本当の世界だという。

● 烈々たる福音

私は前にこんなことを書いた。

「山上の大告白に約束されている「恵福なるかな」の恵福の実現の日が、この再臨の日である。再臨こそはキリストの十転の最終最大の、決定的転機（カイロス）である。第十転を迎えてそこに展開される新天新地の大歓喜の現実は、バッハ、ヘンデル、ベートーヴェン等の大音楽、ダンテ、アウグスティヌス、ゲーテ、藤井武等の大詩篇大文字が夫々の表現をもって聖書に^{おうか}応じて謳歌している。なお、万斛^{ばんこく}の涙を霊泉となし、満身の血潮を烈火となし、全身にみなぎる聖霊を台風となして、この二十世紀の危機の世に一篇の大詩篇を投ずる人はないものだろうか。」（小池辰雄著作集第一巻『無者キリスト』150頁）

とにかく、この烈々たる福音のためには、皆さんも大いにそれぞれの使命において戦ってください。また、身をもって証してください。これほど楽しいことはないですよ。どなたも必ず使命がありますから。もったいないですよ、この福音を証しなかったら。

キリストというひとは大変な方です。

「我を見し者は父を見しなり」

と仰った。湖の上を渡って行ったり、死人を甦えらせたりね。

「キリストは大変な方だ」

と、驚嘆驚倒して読まなかったためですよ。キリストに比較する存在は東西古今にいない。

